

ブルーノ・タウトと建築作品

てゐる。

筆者がウンターレキシングエンの教会を訪問した日は、あいにく前夜から垂れこめていた厚い雲が冷たい細雨に変わったところであつたが、内部に入ると、他の教会とは異なる強烈な印象を受けた。牧師の説明によると、教会信者席は当時の牧師とタウトが協議して、男女同じ数の椅子を並べたそうである。教会にはバイオルガンが必需品であるが、タウトはこの音響効果にまで配慮したという。教会の祭壇はカトリック教会の名残で派手に装飾されていたが、その裏に回ってみると、「B.T.1906」と刻印してあった。フィッシャーの助手といふ立場であつたが、実際に仕事をしたのはタウトであり、あえて刻印したのは自信の表れだろう。

この時タウトは26歳。大恋愛の末、ベルリンの北50kmにあるコリーンの鍛冶屋の娘ヘードヴィック・ヴァオルガストと結婚した年である。このような時には仕事にも力が入るものである。教会には貴族が座る席があり、ここにも華やかな絵が描かれていた。

1909年には独立し、翌年、北ドイツの村ニーベルンゲンで村の教会の改修工事を担当している。この教会はカトリックの教会であったが、プロテスタンタンに改宗したもので、内部にプロテスタント教会にはないはずの装飾が残つ

タウトの修業時代

第1次世界大戦後ナチスドイツの迫害をのがれ、亡命のようなかたちで来日した建築家ブルーノ・タウト。富士山を褒め、桂離宮や伊勢神宮など、日本の美に関する著作を通じて日本文化を世界に紹介した。反面、その人生と作品には、世間に公表されていない一面も残されている。筆者はドイツのブルーノ・タウトの建築作品をすべて取材し、子孫や関係者を訪ね歩いた。その証言や資料を基に、知られるタウトの一面に光を当てたいと考えたためである。

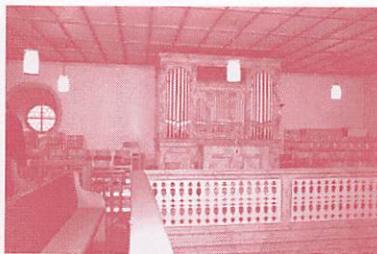
ブルーノ・タウトは1880年5月4日ケーニヒスブルク(当時の東プロイセンの州都、現在はロシア領カリニン格ラード)で生を享け、当地の建築工芸学校を1901年に卒業している。その後ハンブルク、ヴィースバーデン、ベルリンの設計事務所で修業

ドイツ表現主義の旗手

助手となつてすぐさま、イエーナ大学の設計に従事した。その2年後の1906年には、シュトゥットガルトの郊外、ウンターレキシングエンで村の教会の改修工事を担当している。この教会はカトリックの教会であったが、プロテス

タントに改宗したもので、内部にプロテスタント教会にはないはずの装飾が残つ

田中辰明



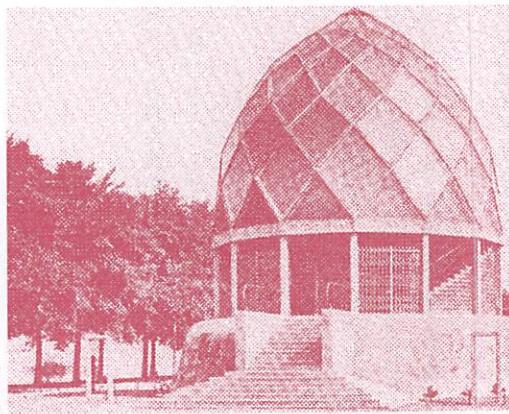
ウンターレキシングエン教会のバイブル
オルガン

常駐しておらず、月に一度、巡回に来る教会である。内部はとてもプロテスタント教会とは思えない装飾が施されており、天使が信者席の上に舞い、説教壇も派手である。ここにはタウトのサインはなかったが、天井を見上げると工事関係者の名前が記されており、その中にタウトの名前を見つけることができた。

1913年、ライプチッヒで開催された国際建築博覧会において「鉄の記念塔」(Monument des Eisens)を発表し、一躍有名になる。さらに1914年、ドイツ・ヴェル

クブント(工作連盟)が主催したケルンの展覧会で「ガラスの家」(Glasshaus)を発表し、タウトの名は世界的なものになった。この作品に対しタウトに多大な影響を与えた人物がいた。パウル・シェーアバルト(1863～1912)である。タウトより17歳年上の詩人で小説も書いた。タウトと同じくカントを尊敬していたシェーアバルトは『ガラス建築』(1914)を著しており、タウトはその影響を強く受けたと述べている。一方、シェーアバルトが同書を執筆する際の建築に関する助言は、タウトが行っていた。

1919年に『都市の冠』(Die Stadtkrone)、『アルプス建築』(Alpine Architektur)を出版し、ドイツ表現主義の旗手として認められるようになつたが、タウトほど建築を芸術としてとらえ、そこに哲学を持ち込んだ建築家はいないであろう。『アルプス建築』では、とても実現できないような建築の理想を夢み、イタリアの湖畔の山頂に建つガラスの建築を描いた。ここには



1914年ケルンのドイツ・ヴェルクブント展に出品した「ガラスの家」

「欧洲には明るさがある。アジアには色彩豊かな夜のなかに、それ以上の明るさがある」と記しており、当時からタウトがアジアに関心を示していたことがわかる。

集合住宅にみるデザイン

1913～16年、ベルリンのファルケンベルクに「田園都市ファルケンベルク」(Gartenstadt Falkenberg)と呼ばれる住宅団地を設計した。ここでは共同生活に関する新しく、住民による農作業や手工業のほか、相互扶助の活動も提案している。また、建物それぞれに異なる色彩を施した。建物それに異なる色彩を施した。

この団地は2008年、ユネスコの世界文化遺産に登録された。

ほぼ同じ時期にザクセンアンハルト州の州都マクデブルクでリフォルム(Reform、

革新)というプロジェクトに基づく集合住宅団地も設計している。作風はベルリンのファルケンベルクと類似しており、黄土色、あざき色に着色されたものが多いた。



マクデブルク集合住宅

1920年、タウトはマクデブルク市建築課長になると、住宅のみならず、マクデブルク市庁舎など市の建築物にも多彩な彩色を施した。それは文豪ゲーテ(1749～1832)の『色彩論』を研究した成果でもある。市庁舎は戦禍を受け、後に復元されたが、彩色は復元されない。そのほか、この時代には大スパンの体育館など、一見タウトの作品とは見えないような公共建築も手掛けている。

公務のかたわら、自らの建築思想の深化を図るために、著作にも励んだ。1920年『都市の解体』(Die Auflösung der Stadt)を発表、さらに季刊建築雑誌『Fröhlichkeit』(晴光の意)を発行し、世界的に信奉者を得た。この建築雑誌に「全ての建築に色彩を!」という色彩宣言を掲げている。

当時のドイツは第1次世界大戦で敗戦国となり、払いきれない賠償金を突き付けられていた。この支払いのために大都市では大工場が稼働し、労働者が集ま

つてきていた。しかし労働者の暮らしは厳しく、その住宅は「監獄」と形容されるほど粗末なものであった。

1924年ベルリンに戻り、市の住宅供給公社(GEHAG)の主任技師となると、タウトは労働者のための集合住宅を多数建設した。

1920年代にタウトが建設した集合住宅は1万2000戸に上る。いずれも、労働者の健康を守るために、採光や通風、隣棟との間隔の確保などに配慮した。

また塗装には、揮発性有機化合物を含んでいない無機塗料を徹底して使用した。健康に生活できる住宅を労働者に提供することは、タウトの使命であったのである。

これらタウト設計の集合住宅のうち、ブリッツの馬蹄形住宅(Hufeisensiedlung Blitz)、シラー公園の集合住宅(Siedlung Schillerpark)、



ブリッツの馬蹄形住宅の内側庭園にはタウトの顕彰碑も設けられた。



シラー公園の集合住宅。オランダ旅行に見聞きしたオランダ建築の影響が見られる。

合住宅もある。こここの団地で一番早く建てられた集合住宅は、緑色に着色されている。

1927年建設

という住宅を訪ね、あ

るご家庭の内部を案内していただいた。

古い建物であることを感じさせないほど、居間はまさに現在の住宅展示場のモデル

ルームのごとく清掃が行き届き、整然としていた。ドイツ婦人の掃除好きは有名であるが、これには脱帽である。

北側の団地の一部に窓などを非常に色鮮やかに塗装した地区がある。ここをオーム地区(ババガイファーテル)と呼んでいる。

住人が窓辺を飾り、都会の中での森の生活を楽しんでいる様子が伝わってくる。

この団地の片隅にタウトの顕彰碑が建っている。そこにはタウトの経歴と共にタウトが好んで使った「建築とは釣り合いの芸術である」という言葉が刻まれている。

タウトは「宇宙の森羅万象はすべて互いに一定の釣り合いを保っているのである。しかし特に建築について、もっぱら釣り合いという概念が用いられているのは何故であろうか。この概念が諸他の部門にも用いられるのは、いわば建築家からの借用に他ならない。釣り合いの概念は特に建築と不可分の関係にある。我々は宇宙を『世界建築』と称し、また宇宙の『構成』、国家の『構造』、音楽や文学あるいは造形芸術等の『構成』などといふ言葉を使う。これらの表現は明らかに、釣り合いを指しているのである。ある建

築物の美しさをよく整った国家秩序に例づする道に沿つてゆるやかに弧を描く集

カール・レギーンの
集合住宅

在、ユネスコの世界文

化遺産に登録されてい
る。田園都

市ファルケンベルクを含めるとブルー
ノ・タウトが設計した4つの住宅団地が
ユネスコの世界文化遺産に登録されたと
いうことになる。

ユネスコの世界文化遺産登録はされて
いないが、筆者が好きな住宅団地に「森
の住宅団地 オンケル・トムズ・ヒュッテ」
(Waldsiedlung Onkel Toms Hütte) がある。ベルリン
の地下鉄3号線クルメランケ(Krumme Lanke)
行きに乗り、終点のひとつ手前の駅オン
ケル・トムズ・ヒュッテで下車すると、
目の前に団地が広がっている。地下鉄の
駅構内にはいろいろな商店が連なってい
るが、これは、タウトが団地内に商店を
設けさせず、駅構内に集中させたためで
ある。まさに駅中商店街のはじりである。
地下鉄の線路を挟み、北側と南側に団地
が整然と、緑豊かに、歴史を感じさせる
たたずまいを呈しており、しばし立ち去
りたい思いに囚われる。都會にあって
も田園生活を満喫できるようにとのタウ
トの配慮から、団地内に松や白樺、そし
て庭には芝生が植えられた。前面のカーブ

する道に沿つてゆるやかに弧を描く集



う題でこの住宅を紹介している。筆者は一度々この住宅を訪ねており、その保存・修復活動にも参画した。

道路に面した外観は、円弧を描くように丸みを帯びて、チャコールグレーに彩色されており、そこに白色の玄関扉がある。窓枠は外から内に向かって3段階に造られており、青、オレンジ、白の塗装がなされている。屋根はフラットの陸屋根で、住宅の片側には長方形のレンガ造りの物置とガレージが付設されている。延べ床面積は264m²、敷地面積は1500m²。1階には扇状の形をした居間と厨房、書斎があり、さらに飛び出するような形をして洗濯室、車庫、機械室がある。タウトは当時から車を使用していた。2階には寝室、浴室、バルコニーがある。

現在の住人は画家でもあるディープナーザンで、2階にアトリエがある。非常に鮮やかな彩色のアトリエだが、ディープナーザンはここで仕事をする時が一番落ち着くという。アトリエからバルコニーへの出口も補色で彩色した扉が付いている。敷地の西側には広い野原が広がり、野原の先にはダーレビツツの森が広がっている。室内からも景色が見渡せるようになっている。室内の窓には大きなガラスを採用している。

ダーレビツツに残る自邸
1926～27年にかけて、ベルリンの南約50kmのところにあるダーレビツツ(Dalheim)という村に、タウトは伴侶エリカと共に住むための自邸を建設した。これはタウトの自信作で、これを自ら論じた『ある住宅』(Ein Wohnhaus)という本を著している。また来日後も『婦人之友』1934年10月号に「近代的住宅」とい

また、円弧状の外壁の一部には、タ

ウトの若い頃の作品「ガラスの家」を彷彿させるガラスプロッ

クがはめ込まれている。この内側に1階から2階へ上がる階段があり、自然光を取り入れるようになっている。



ベルリンで見られるその他の作品

1926年から27年にかけてシェーンラカーブ通り(Schönleberstraße)の集合住宅を設計している。近くにあるゴシック教会の尖塔が集合住宅のアクセントとなつており、素晴らしい風情を醸し出している。玄関を入れると階段室があり、自然採光ができるようにガラス窓をつけている。階段室の左右の住戸には外に張り出たバルコニーがあり、今も住人たちはそれを花や蔓性の植物を植えている。

ホーフンシエーンハウゼン(Hohenschönhausen)では、やや小形の集合住宅を設計している。この住宅には畜小屋があり、都會にありながら田園生活を送れるようになりたいタウトの思想が投影されている。トリエラー通り(Trieler Straße)には、やはり派手な彩色を施した集合住宅を設計して

ダーレビツツのタウト旧宅。庭園側からの外観。人物はディープナーさんと筆者。

いる。

1925年から31年にかけて、テーゲル(Tege)地区にフライエ・ショレ(Freie Scholle)という大団地を手掛けている。緩い坂道にも住宅が建ち、隣家と玄関の位置に高低差があるものもある。ここの中集合住宅にも無機の塗料が使用された。1927~28年は、グレル通り(Grellstraße)に前面の道に沿って緩やかに弧を描く集合住宅を設計している。このほか、1911年テーゲル地区のノンネンダム通り(Nonne-nen-damm)に賃貸住宅を、ノイケルン(Neukölln)地区のコトブサーダム(Kottbusser Damm)に事務所と住宅と一緒にした複合建築を2棟設計している。



ホーフンシェーンハウゼンの小形集合住宅。家畜小屋

シェーンラーケ通りの集合住宅の玄関と階段室



来日したタウトの境遇

1932年にタウトはソ連に行き、モスクワ都市管理局で大モスクワ建設事務所創設に関与する。このことと、タウトが社会主義者であったことが台頭してきたナチスに睨まれる要因となり、自分に逮捕状が出ていることを知つて1933年、亡命者のような形で憧れていた日本へやつてくる。しかし日本はナチスと組んでいこうとしていた時代であつたので、ナチスを逃れて来日したタウトにとって望ましい状況ではなかつた。職もななく高崎市郊外の少林山達磨寺の庵「洗心亭」に居を構え、工芸を指導する一方、日本文化を世界に紹介する『二

熱海の旧日向別邸

日本ではたいした建築設計活動もできず、わずかに現存する作品は熱海市に残る「旧日向別邸」の地下室のみである。発注者の日向利兵衛(1874~1939)は大阪の実業家で、紫檀、黒檀など銘木を輸入し、工芸的家具類を製造、販売する「唐木屋」の一人息子として生を享け、語学と幅広い人脉を駆使して特にアジア貿易で財をなした。美術、建築に造詣が深く、タウトのデザインした電気スタンドを銀座のミラテス工芸店で買って、そのデザインに感銘した利兵衛は、すでに完成していた熱海の別邸の鉄筋コンクリート造りの下部構造にできた空間(いわば

ツボン ヨーロッパ人の眼で見た』『日本美の再発見』『日本文化私觀』などを著した。またほぼ毎日、日記を書き、死後『日本 タウトの日記』として刊行された。

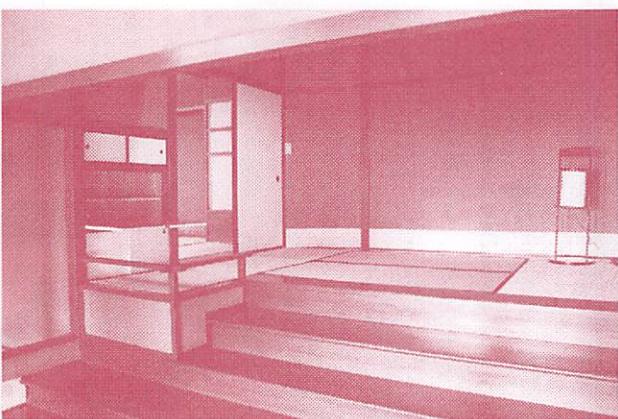
著作の中で特に桂離宮と伊勢神宮、さらには富士山や日本の工芸品をほめたたえた。技術的にも文化的にも西欧に劣等感を持っていた当時の日本にとって、外国人から「日本の文化はすばらしい!」と褒められることは日本の国威高揚に好都合であった。大政翼賛会の書物にもタウトは好意をもつて記述された。著書は当時の文部省の推薦を受け、多数の読者を得たが、本来、社会主義者で平和主義者であったタウトにとっては迷惑な話であつたろう。

半地下室)に、居間と社交室を設けようとしてタウトに設計を依頼した。タウトは、

日本の素材を使い、桂離宮に通じる様式美を実現しようとしていた。

タウト自身の言葉によれば、「全体として明快厳密で、ピンポン室(あるいは舞踏室)、洋風のモダンな居間、日本座敷及び日本風のヴェランダを、一列に並べた配置はすぐれた階調を示している」という。

依頼に当たっては、利兵衛はわざわざ上多賀に民家を借り、タウトと伴侶エリカの居所とした。夫妻は1935年9月9日までここで仕事を兼住まいとし、設計業務に専念した。



田口向別邸和室

身の言葉によれば、「全体として明快厳密で、ピンポン室(あるいは舞踏室)、洋風のモダンな居間、日本座敷及び日本風のヴェランダを、一列に並べた配置はすぐれた階調を示している」という。

依頼に当たっては、利兵衛はわざわざ上多賀に民家を借り、タウトと伴侶エリカの居所とした。夫妻は1935年9月9日までここで仕事を兼住まいとし、設計業務に専念した。

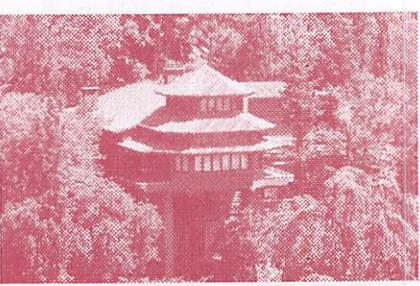
トルコでの作品

しかし大好きであった日本でもユダヤ

人説が流されたり、特高に付きまとわれたりし、やがて憂鬱な日を過ごすようになる。そこにトルコのイスタンブール芸術アカデミーより教授の口がかかり、1936年10月8日、洗心亭を発ち、同月15日、関釜連絡船で離日する。トルコでは新生トルコ共和国の指導者アタチュルク大統領に重用され、トルコ文科省建築研究主任を兼務し、重要なプロジェクトに参加する。特に首都をイスタンブールからアンカラへ遷すため、アンカラ大学、高等学校、中学校などの設計を行つた。しかしタウトに全面的に仕事を任せ、タウトも信頼していたアタチュルク大統領が、1938年11月10日に急死、タウトは葬儀場の設計を依頼されたが、過労により脳溢血を起こし、尊敬するアタチュルク大統領を追うかのとく、同年12月24日、東西文化の分岐点であるイスタンブールで生涯を閉じる。享年58であった。今はイスタンブールのエディルネ門国葬墓地に静かに眠っている。

世界の三大建築家というと、多くの人がコルビュジエ、ミース・ファン・デル・ローフ、フランク・ロイド・ライトを挙げるだろう。四大建築家となるところにグロビウスが入る。皆、長生きをしている建築家である。業績というのは、長生きをしないと残らないものである。西洋文化と東洋文化を併せてよく理解したタウトがもっと長生きしていたならば、さらに素晴らしい建築をトルコに残すことができたのではないか。残念なことである。

イスタンブールの自邸。実際には居住しなかった。



所在地一覧

田園都市田代ケハベルク
Berlin-Grünau, Akatienhof 1-2.

トロットの馬蹄形住印
Berlin-Britz, südliche Akatienwäldchen an der

Bläckkölle

ハーレ公園の集合住印
Berlin Wedding, Bristolstraße, Dubliner Straße,

Corker Straße, Barfusstraße

Berlin-Zehlendorf, Beiderseits der Argentinischen Allee,

カール・ヨニーの集合住印
Berlin-Prenzlauer Berg beiderseits der Erich-Weinert-Straße

森の世紀回廊カハケル・ムック・ウラヒ

Berlin-Zehlendorf, Beiderseits der Argentinischen Allee,

カール・ヨニーの集合住印
Berlin-Prenzlauer Berg beiderseits der Erich-Weinert-Straße

ダーレンロッハのタウト邸
Dahlewitz, Landkreis Teltow, Fläming, Wiesenstraße

ムーハー通りの集合住印
Berlin-Weißensee, Trierer Straße 8-18

シーハルカーリ通りの集合住印
Berlin-Prenzlauer Berg Ernst-Hunstenberg Straße,

トーネル地区トーネル・ハニ・レ集合住印
Berlin-Kreuzberg, Kottbusserdamm 2-3

ハイエルハ地区ムーハーの集合住印
Berlin-Neukölln, Kottbusserdamm 90

田口向別邸
静岡県熱海市春日町8-37